

【インタビュー】

伊東俊太郎先生インタビュー

科学史の過去・現在・未来

聞き手・編集：鶴田想人・須田千晶・荒木裕太

（編集者注：草創期より科学史・科学哲学研究室の運営に尽力され、日本における科学史研究の礎を築かれた伊東俊太郎先生に、研究室の成り立ちや先生の国内外でのご研究、そして科学史・科学哲学研究の今後の展望についてのお考えを伺った。聞き手は古代中世におけるイスラーム科学史がご専門の三村太郎先生の研究室の院生三名が務めた。なお、以下文中の（ ）内は編集者による補足である。）

（この面会時間は）原則 30 分って言われてる。だけど 3 人で来て 30 分じゃちょっと気の毒だよな！ 遠くから来てるのに。だからそっと 1 時間くらい話してもいいかなあって思うんだよね（笑）。だから要領よく質問しちゃってよ。それで僕が答えると。（質問紙をお渡しする。）うん、なるほど。これは随分こう... しっかりとした質問だね。なるほど..... 分かりました。まず 1 から行こう。

1. 科学史・科学哲学研究室（科哲）の草創期について

「科学史・科学哲学研究室の草創期について」なんだが、これね、戦後、新制大学ができたでしょ？ 新制大学ができて 2 年経つと、駒場の後期課程に教養学科というのができてね、いろんな新しい学問が——これまで東大になかった学問が入ってきた。例えば文化人類学、それから国際関係論。そしてそれと並んで科学史・科学哲学というものができた。あと、イギリス分科、ドイツ分科、フランス分科。あと、アメリカ分科もあった。そういうのが並んで後期課程にできたわけだよな。

それで僕が東大教養学部に入って。僕は理科一類に入ったんだよ。その前は

東京高校っていう旧制の高等学校。東京には一高と東京高校があって、僕は東京高校なんだよ。東京高校も理科だった。理科甲類。というわけで、一つの可能性としては、新しく教養学科ができて、そこに科学史・科学哲学がある。そして僕は科学史にも科学哲学にも興味持ってる。だからそこへ入る……んだが、僕は入らなかった。なぜか。まだ先生がいないんだよ。専門の先生が誰もいない（笑）。

で、玉蟲文一（1898–1982）先生という……このお名前は重要だよ。科学史・科学哲学研究室を作った方だから。専門は化学でね。玉蟲文一先生が主任として頑張っていた。他にも自然科学の物理の小野健一（1919–2010）先生とか、生物の木村陽二郎（1912–2006）先生がいらした。博物学の先生だよ。だけど教養学部で教えてるのは生物学で。……のちに出た『日本自然誌の成立』（中央公論社、1974年）、あれはとってもいい本だよ。

だけどまだ全然整備されてなかった。それで僕は文学部の哲学科に行ったんだよ。みんなね、そりゃ理科一類に入ったら……そのとき僕が一番できたのは、できたってのはおかしいけど、理学部でいったら数学科に行く可能性はあった。というのは、僕は実験が下手だったことがわかったんだよ（笑）。理科に入ったらどんなメリットがあるかということ、実験ができるっていうことだよ。文科に実験はないから。だから実験やってくのがいいのかなあって思った。しかし化学の実験なんか全然。これとこれを混ぜたら赤い液になるって言ったって全然出てこないんだよ、僕がやると（笑）。だから、手先のことが全然ダメだった。工学部も物を作ったりするから、それも僕はダメ。残るのは数学だけだけど、数学は幸いできた。まあ数学で東大うかったようなもんなんだよ。東京高校の数学の先生も、僕に数学を進めてくれて¹。矢野健太郎（1912–1993）さんの家^{うち}へね、その先生の紹介で行ったりなんかして。でも、結局……（哲学科に行った）。桂寿一（1902–1985）先生って知ってる？ 偉い人なんだけど、僕の哲学の指導教官。桂先生も数学から哲学に行った。それで「（哲学科に）来いよ」と。

1 黒須康之介（1893–1970）。Cf. 伊東俊太郎「我が師・我が友・我が人生」、『伊東俊太郎著作集』（以下、『著作集』）（麗澤大学出版会、2008–2010年）第11巻所収、367頁。

こうして僕は哲学科へ行って、科学哲学をやるということで入った。そしたらその研究室にはね、池上鎌三（1900–1956）先生っていう人がいた。（すぐに）亡くなってしまったけど、とって科学史・科学哲学に理解を持ってくれた方で、とても良かった。僕にとってね。……普通はね、理科から哲学なんて、全然就職がないんだよ。だって哲学って人々にとっては要らないじゃない！ 理科を出てれば、いろいろ融通が効くよね。だから馬鹿なことをやってるんだけど、それでも僕はやりたいことをやるってことで哲学科に入った。

それで修士課程、博士課程と進んで。そしたらね、ドクター1年のとき、——だからそのとき26（歳）か、まだ若い。突然桂先生のところから電話があって、何事かと思ったら、「教養学科に今度科学史・科学哲学ができただろう？」と。「その助手になって行ってくれ」って言うんですよ。それでびっくりしちゃってね。ドクター出てもそんなに就職ないのに、ドクターも出てない1年のときに行けって言われて。まあ、ありがたい話だから、「そうですか、それはどうもありがとうございます」ってことで、教養学部教養学科科学史・科学哲学研究室の助手になった。

1-1. 伊東先生が科哲に合流された経緯（当時他にどのような先生がいらっしゃったか）

さて、この質問に答えるけど、この科学史・科学哲学科なるものは創設当時、どんな人がいたかという、大森荘蔵（1921–1997）先生がお一人、専門でいらっしゃった。（最初は）専門家がいなかったんだけど、大森先生がアメリカから帰ってこられて。大森先生はね、すごく偉い先生だよ。理学部の物理を出ただけど、哲学やりたくてアメリカに行って。それで玉蟲先生が大森先生を専任講師に雇った。だから専門家は大森先生一人だった。そこへ僕が行ったから、大森先生が科学哲学で、僕が科学史、という感じなんだよね。僕は科学哲学にも興味を持っていたから、大森先生と議論するのがもう楽しくて。

それですごいんだよ、大森先生は！ 授業はこの（A4の質問紙）半分くらいの紙っぺらを持ってきてね。それで自分の考えを30分くらい滔々と述べて、そ

れで「さあ、質問してくれ」って言うんです。学生と議論する、これが授業なんだよ。何かノートを持ってきて読むとかそういうのは全然ないの。だから野家啓一（1949-）君とか、科哲を出た学生はみんな、それで鍛えられたんだよ。僕もその授業に出てね、最後になるとだいたい大森・伊東の論争で終わっちゃうの。それに大学院の学生が入ってガチャガチャやる。こういう授業だったよ。だからすごい活発な研究をしたよね。普通は先生が何かノート持ってベラベラと喋って、終わると行っちゃうというのは（よく）あるけど、大森先生はどこまでも議論した。だから、質問はしてくれ。だけど曖昧なこと、それから人の意見をずらずら言う、これはやめてくれと。自分の考えだけ言ってくれと。だからいい訓練になったんだろうなあ！ 野家、野矢（茂樹、1954-）、その他みんな、いい教育を受けた。大森先生がいたからね。

だから当初は、大森・伊東で始まったってこと。専門家は二人だけだった。あとは自然科学の方々がいらっしやった。木村雄吉（1904-1989）っていう生化学の先生も、科哲の演習なんか一緒にやって、科哲の学生をうんと可愛がった。そこから永井克孝（1931-2014）さんとか、生化学で偉くなった人が出たんだ、科哲からね。... これで（1の）1はだいたい終わったかな。

1-2. 科哲創設当時、どのような研究室が目指されていたか

この「目指してたもの」っていうのはね。... そうね、困ったね（笑）。あのね、目指してたものはもちろん、科学の歴史と哲学で、英語の正式な名前は Department of History and Philosophy of Science。そういうのが、アメリカには戦後かなりできていた。ハーヴァードをはじめ、イエール、ウィスコンシン、どこどこってね。玉蟲先生は教養学科を作るっていうことでアメリカの大学を視察したんだよね。それでこの科学史・科学哲学科っていうものもそこに作ろうと、きっとお考えになったんでしょうね。

教養学科の他の(学科の)先生で有名な人っていうと、前田陽一(1911-1987)って方がいた。フランス科の、すごくいい先生だった。それからもう一人、木村健康(1909-1973)という人がいた。イギリス科の、経済学の先生で、この人

もよくやった方だ^{かた}と思う。... まあ、(他学科は) そんな感じだけど、一番ははっきりしないのは、科学史・科学哲学だろうな。文化人類学なんかははっきりしてるよね。アメリカで相当できてるからね。これは泉靖一(1915-1970)っていうアンデスの大発見をやった、いい先生が来てた。国際関係論も衛藤藩吉(1923-2007)という、とてもいい学者が来てね。だいたい他はやることははっきりしてるよね。

でも科学史・科学哲学って言われちゃうと..... みんな迷いながらね、入って来たんじゃないかと思うよ。だから医学部を目指してるのが、(医学部に) 入る前に、2年ぐらいフリーな勉強をしようと。それで科学史・科学哲学ってなんだかわかんないけど、入ってやってみようみたいな人もいて。事実、そこから医学部行った人で偉くなった人もいるよ。神経生理学で実がいい仕事をした鈴木邦彦(1932-)さんとかね。

そういうことなので、目指してたのは、科学というものはどういうものであるかということをしっかり考える科学哲学と、それからその歴史を精密に明らかにする科学史、という建前だよ。大森先生と僕はだいたいそうした建前に、自分なりのやり方でやっていった。前例の先生がいてやってるとだいたいわかるけど、まだ前例がないからね。だから自分で考えながらやっていった。

1-3. 草創期の科学哲学と科学史の関係はどのようなものだったか

「科学史と科学哲学の関係」ね。僕自身がその頃は、科学史と科学哲学の間をグラグラしててね。だんだん僕は科学史、大森先生は科学哲学に..... いや、大森先生は科学哲学からね、科学史の勉強をしだしたんだよ！ 僕と議論している間に。それでいい本を書いておられるんだよ。科学史の専門書ではないけど、科学史研究を含めた、とってもいい本を書いている。なんていったかな、あれは...

鶴田：『知の構築とその呪縛』(ちくま学芸文庫、1994年)でしょうか。

そうそう、よく知ってるねえ！ あれはねえ、いい本だよ。あれは後になって、大森先生が僕と議論をしているうちに科学史をおやりになったというわけ。

...だからなんていうかな、あんまりはっきり分かれてないよね。僕も科学哲学をやって科学史もやる。大森先生も科学哲学を盛んにやりながら科学史をやった。そんな関係だね。

2. 伊東先生のご研究について

次に、2の「伊東先生のご研究について」。

2-1. 哲学から科学史に進まれたきっかけ・経緯

「哲学から科学史に進まれたきっかけ」。これねえ、うん... 哲学科に行ったときに僕は、ヘーゲルだとかカントだとか、哲学者を研究しようと思って行かなかった。科学哲学ということで入って、数理哲学をやった。最初の論文、学部の論文が無限論、集合論ですよ²。集合論の哲学的な考察。修士課程は何をやったかっていうと、時間論³。だから無限論とか時間論とか、テーマで研究してた。

他の人はだいたい哲学科に入ってくると、カントやります、ヘーゲルやりますとかだよ。僕ももちろんあそこに入ってカントをやり、それからこれは学部のときもそうだけど、ギリシャ語とギリシャ哲学をしっかりとやった。ラテン語も前からやってたけど、しっかりとやった。だから哲学科にいたときに、ギリシャ語とかラテン語とかのクラシックな勉強が一番身についたんじゃないかなあって思うよ。

だから哲学っていう何か固有なものがあって、それをやって科学史に移ったんじゃないくて、始めから科学史・科学哲学のテーマをもって、科学哲学をやってたわけ。無限論とか時間論とかをね。で、ドクターに入って、ドクター論文

2 「無限の構造について」。これに基づく論考が「数学における無限と有限——ギリシアからカントルまで」として『著作集』第5巻に収められている。

3 「時間論」。これに基づく論考が「時間論の根本問題——存在の時間と意識の時間」として『著作集』第5巻に収められている。

は何しようかと考えてるうちに、(助手として) 教養学部行っちゃったってことですよね。

2-2. アラビア科学史を研究されたきっかけ

さて、次は「アラビア科学史を研究したきっかけ」。ああ、これはいい質問だねえ。あのね... これはやっぱり日本ではダメだったね。だいたいアラビア語を学ぶ機会がないよ。教養学部にはアラビア語の先生が一人もいなかったんだからね。だからアラビア語を教える人がいないし、習うこともできない。今はアラビア語はやってるよね。教養学部でもやってるし、本郷には学科ができてると思う。僕のところの学生だった一人が教授になって。... だから東大にいるときは全然アラビア語を学ぶことはなかったね。ギリシャ語やラテン語を集中的にやった。

ところが、5年間助手をやったら、玉蟲先生が定年になった。僕は玉蟲先生の助手ということで行ったので、玉蟲先生の授業の手伝いとかね、色んなことをやってたわけ。玉蟲先生は化学者だけれど、科学史に非常に教養がある方で、ご自分でもものすごく興味を持ってやっておられたから、それを助ける、ということで行ったんだけど、(玉蟲先生が) 辞められたんだよね。

それで僕はある意味で解放されたかな。やっぱり玉蟲先生を助けるために行ってるんだから、玉蟲先生がいるうちに外国は行けないよね。ところが玉蟲先生がいなくなって、桂先生が大森先生に「伊東をそろそろ外国へやったらどうか」って話されたんだって。それで僕も、ちょうど玉蟲先生の任期が終わったっていうので、じゃあアメリカに行こうと。それで何をやるかって言うと、僕はラテン語をすごくやってたから、中世の科学にした。

これは当時ほとんど空白と考えられていたんだよ。中世は暗黒時代で、科学は何もありませんって。僕が本を書いたから今じゃそう思わない人が多くなったけど⁴、その当時はもう中世暗黒時代で、科学なんか何にもないよってことだっ

4 『近代科学の源流』(中公文庫、2007年)、『十二世紀ルネサンス』(講談社学術文庫、2006年)などを指すと思われる。

たからね。

ところが、マーシャル・クラゲット (Marshall Clagett, 1916–2005) っていう先生が、『中世における力学』っていう本を書いた。厚い本で、ラテン語の原文と英訳、それからそれについての詳しい研究が書いてあって。 *The Science of Mechanics in the Middle Ages* (University of Wisconsin Press, 1959) って本。僕も「へー！」っということを読んでよ。これは面白いや、誰もやってないじゃないか。だけどガリレオだったか、ニュートンなんかも含めた 17 世紀の力学、そういうのの先駆的な研究がなされてるんだよ。その「空白」の 12 世紀から 14 世紀、特に 14 世紀にはもう「落体の法則」なんかも、実験はないけれど数式みたいなのが出てたりしてて、すごく面白いんだよ。

クラゲット先生はその頃ウィスコンシン大学の人文科学研究所、Institute for Research in the Humanities の所長だった。僕は手紙を書いて、「僕も非常に興味があるので先生のところに行きたいと思います」って書いた。その頃までに書いた僕の論文で、英語のものもあるからそれも送ったら、なんと！ その一通の手紙だけで、クラゲット先生は僕を招いてくれたんだよ。

当時、クラゲット先生は研究会を作ろうとしてたわけ。ウィスコンシンの学生やら他のところの大学院生やなんか来る研究会を組織しようとしてた。だからその研究会の助手、研究助手っていうんだよね、リサーチではなくてプログラム・アシスタント、それに迎えてくれたわけ。その頃東大の助手だったんだけど、それで、ウィスコンシン大学に行ったんだよ。

その頃ウィスコンシンを中心に、みんなそこへ中世の科学史やる人が面白いっていうので集まっていた。ハーヴァードもイェールも、中世の科学をする人は、マードック (John E. Murdoch, 1927–2010) がそうだけど、みんなウィスコンシンのクラゲットのところで Ph.D をとっていった人なんだ。クラゲットの最後の弟子が僕で、ハーヴァードへ行ったマードックは兄弟子かな。

そこでね、クラゲット先生とこういうふうに対面で、中世のラテン語のテキストを学ぶわけ。まだ読まれてないやつをね。しかも中世ラテン語で、みんな省略で書いてあるわけだよ。そのまま書くと長いから、お坊さんがみんな省略を考えて、e の上にこれ (̄) を付けると est (「在る」) とかってどんどん書

いていく。省略の辞書もあって、初めのうちはそれを使うけど、そのうちに慣れて使わずに読んでくわけ。まあたまに見るけどね。それで、二人で読むとクラゲット先生に「うーん、そこはこうじゃないか」って言われたりなんかして。東大なんて、そういうの何にもないよ！ ただ勝手にやって、時間論・空間論で論文出して、修士号をもらうけども、何にもなかった。でもアメリカは違うなあって。まあ、もっともそれは僕だけだけどね。プログラム・アシスタントだから、こいつは鍛えなきゃいけないと思ったのかもしれないよね。

だから僕は（向こうで）ドクター取ってくるつもりはなかったんだ。そしたらクラゲットがあるとき、「またアメリカへ来るつもりはある？」って言ったから「ありますよ。まだまだやることいっぱいあるから」と返したら、「そうか、だったら、Ph.Dを取ったらどうだい？」って言い出したんだよ。Ph.Dって、向こうの博士号だね。僕はだけど、「実は東大から2年しか時間をもらってないんです」と。3年に入っちゃったら他の人が助手になっても文句言えないよね。だから「2年で取れますか？」って言ったらね、クラゲットが学則書なんかを持ってきて、「難しいけど、可能だ」って言うんだよ。それで（Ph.Dを）やることになっちゃって。

それでまず受けるのが2ヶ国語（の試験）なんだよ。外国語。僕はドイツ語とフランス語だよ。それを通らないと candidate（博士候補生）になれないわけ。みんなダメな人はそこで落っこちちゃうんだけど、僕は一回で通った。そしたらクラゲットが拍手してくれて、「よろしい」と。

というわけで、じゃあ今までまだ読まれてない、未知のものをということで、僕はユークリッドを取り上げた。ユークリッドの *Elementa*、有名な『原論』っていうのがあるよね。それはもう他の人が分担してやってる。じゃあ僕はまだ取り残された『ダタ』(Data) というね、そのユークリッドの『原論』を読んだ人が読む本（をやろうと）。『ダタ』っていうのは、幾何の解法の手解きになるような本なんだよ。普通、演繹っていうのは、原理があってそれから命題を導くんだけど、（『ダタ』では逆に）この命題が与えられてるとき、その原理へ逆方向で遡及する方法を述べてると言ったらいいかな。だから（『原論』の）続編だよ。でも短いわけ。ユークリッド『原論』は13巻とかで大きいけど、『ダ

タ』はもう1巻で完結してるの。それを取り上げるようになって、ありがたいことに、クラゲットはヨーロッパ中のラテン語の manuscript を集めてくれていた。だから他のもの（写本）も、必要だったらすぐそこにあって参照できるわけだよ。

だけど僕は東大でドクターを取ってないよね、1年で（助手に）行っちゃったから。だからドクター・コースが残っているわけだ。だからドクター・コースの単位の残りを、しょうがないから向こうでとった。東大の単位は生かしてくれて、それで向こうでいくつかの大学院の授業をとった。バビロニアの数学なんてのも面白いよ。だけど難しいよ！ そういうのを僕は一時期やったけど、それはある先生がシュメール語とかバビロニア語のことをやってたからね。

そうして単位を満たし、次に論文。テキストをまずしっかりやる。クラゲットが全部調べてくれて、manuscript は4つあった。あ、そのときはまだ2つだったね、パリとオックスフォードだけ⁵。それらを見比べてね。よくテキストでラテン語が書いてあって、下の方になんか線を引っ張って何か書いてあるでしょ。あれはいわゆる collation といって、いろんなテキストを校合^{きょうごう}して、ここではこう採ったけど実は他のテキストではこうなってる、って違いをずっと書いていくんだよ。それはもう本当になんていうかなあ……！ ずっと中へ籠もってやって、朝が明けて来る頃、研究室を出て帰るとかね。そんな感じで結局（論文を書き終えて）、試験を受けたんだよ。だから1年何ヶ月か、8ヶ月か9ヶ月かで論文を書いた。よくやったと思うよ。そしたら通っちゃったんだよ！ 試験は4人ぐらい先生がいて、質問が来るわけだよ。ここはどうなんだ、ここはどうだってね。論文審査といってもディスカッションだよ、向こうはね。それで通っちゃったから、秘書が親切にも「通りましたよ」って電話をくれた。それでクラゲットのところに行ったら、「受かったよ」「Congratulations!」と。

（『ダタ』は）12世紀の manuscript なんだよ。…というのはラテン語の書体から判断するんだけどね、世紀によって変わってくるから。ラテン語の変遷、あ

5 博士論文“The Medieval Latin Translation of the Data of Euclid”（1963年）は、後にベルリンとドレスデンの2写本も検討が加えられ、University of Tokyo Press & Birkhäuser から出版された（1980年）。後者は『著作集』第12巻に所収。

るいは省略の変遷とかそういうのから、僕は12世紀だって判定した。ではどこでそんな翻訳が行われたのか。12世紀だと、ギリシャ語からラテン語に移したか、アラビア語からラテン語かの二つの道があるんだよ。どっちかわからないわけだ。だから、アラビア語はそこでやったわけ。アラビアから来た可能性もあるからアラビア語もやった。

それでアラビア語のテキストはどうなっているかを調べた。ギリシャ語の原典に拠ってそれがアラビア語に訳されて、それがラテン語に訳されたのか、あるいはギリシャ語の原典から直接ラテン語に訳されたのか、この二つの可能性があるわけで。では、どこでその翻訳が起こったのかということ、それはシシリー（シチリア）島だと、僕はさまざまな観点から考えた。

シシリー島だと先駆者がいてね。まずハイベルク（Johan L. Heiberg, 1854–1928）っていう有名な人で、ユークリッドやアルキメデスの原典を出した人だよ。この人の研究に、シシリーの先駆的研究があった。もう一人、アメリカのハスキンス（Charles H. Haskins, 1870–1937）っていう、有名な中世科学史の本（*Studies in the History of Medieval Science*, Harvard University Press, 1924）を出してる有名な人がいる。彼はプトレマイオスの『アルmageスト』を研究したんだけど、これもシシリー島で訳されたっていう論文が出てる⁶。それらを僕は結局受け継ぐことになっちゃった。

というのは、『ダタ』を訳したのも）それとおんなじ人だろうっていうのが僕の仮説だからね。ユークリッドの『原論』だけじゃないんだ。僕が初めて世の中に出す『ダタ』、これもその人が訳したんだって。それから後2つあるんだよ、*De motu*（『運動論』）ってのと、もう一つあるんだけど、それも一緒にね。それで12世紀のシシリーっていうのを僕はやって、ハスキンス、ハイベルクの研究を継承する結果になっちゃった。だから、すごく大きいところにぶつかったというかね。それで、その時にアラビア語だよ。だからアメリカに行ってアラビア語をやったんだよ。

クラゲットも一緒に（アラビア語を）やってた。マードックもやった。同

6 ハイベルク（ハイベア）とハスキンスの論文については『十二世紀ルネサンス』208–209頁（または『著作集』第10巻、169–170頁）を参照のこと。

じような状況だからね。つまり『十二世紀ルネサンス』（講談社学術文庫、2006年）という本を僕が出したけど、そこではアラビア経由とギリシャからと両方を考えなきゃって、それでラテン世界が「十二世紀ルネサンス」で、新しくなるんだって（書いた）。だからアラビア語はたえず一方において考えなければならぬ。それでアラビア語をやった。それでアラビア語はこうなってるけどギリシャ語ではこうなってる、っていうことでやってみると、明らかに僕のテキストはギリシャ語から来ているということがわかった。アラビア語じゃなかった。だけど、それでもアラビア語はやらなきゃって。それで読んだよ、あの文字を（笑）。

ところで三村（太郎）さんは今どうしてる？ 彼は僕は直接には教えないけど、っていうのは僕がもう（科哲を）出ちゃった後で三村さんが入ってきたからね。でも非常にできる人だっていうのを僕は聞いている。それで彼はアラビア語、もちろんギリシャ語、ラテン語ができる。だからいい人が来たんだよ、東大にね。本当によかった。本当の学者が来たという感じだな、東大に！ 僕はそう思うよ。三村君ってそういう人。彼は文明論で視野も広いんだよ。僕のこととも言及してくれているけどね。視野も広いし、精密。でしょ？ 三村君、非常に精密だと思うよ。

僕のとときにはもうテキストを読むだけだった。明日はアラビア語の *Elementa*（『言論』）の原文を読むから、読んできなさいって。それで高橋（憲一、1946-）君とか三浦（伸夫、1950-）君とか、サンスクリットの楠葉（隆徳、1952-）君とかで、テキストを読んでね。アラビア語っていうのは、母音は自分でつけるんだから、読み方が大変だよ。読んでて時々「先生、そこはaじゃなくてiじゃないですか？」っていうこういう質問が出るんだよ。すると僕も困っちゃうんだよ。「そうだな、そっちの方がいいな」ってね。そういう質問をよくしたのは東海大学にいった鈴木孝典君。アラビア語は彼が一番よくやったけど、みんなよくやった。高橋君もよくやった。三浦君も本当によくやった。... そういうわけで、アラビア語を始めたわけ。

2-3. 比較文明学を研究されたきっかけ

次は…「比較文明学を研究されたきっかけ」。これも簡単に言うと、まあ僕は比較が好きだよ。というのはテキストの比較なんてまさにそうじゃない。アラビア訳とギリシャ原典とラテン語訳、みんなこれ比較だよ。だから比較っていう視野はね、僕は好きというか、必要だと思うんだ。比較によって本当にわかってくるんだよ。一つだけやってちゃダメなんだよ。“これ”と対照させて“あれ”も一緒にやってみると“これ”の本性がわかる、ってことは一般的に言えるよね。それで視野の広さと狭さとが決まっちゃうわけ。これは他の学問をやるときも、僕はそうだと思う。科学の比較も、僕は盛んにやるように言ってるけど、これは非常に難しい。まあニーダム（Joseph Needham, 1900–1995）がね、中国の科学でやってくれたけど。なかなか難しく大変だけども。

僕には、比較の方ではトインビー（Arnold J. Toynbee, 1889–1975）が大きな先駆者だよ。トインビーは文明全体を比較するというのをやって、あんな大きな本（『歴史の研究』全12巻、1934–1954年）を書いたんだよ。でもよく読んでみると、ちょっといい加減なところがたーくさんあってね。これじゃダメだ。僕はテキストの比較をやってるから、これについては強みがある。トインビーはまずそれをやらない。ギリシャ語はよくできて、ラテン語もできるけど、アラビア語は全然。それにガリレオのガの字も出てこない。科学は全然ダメ。トインビー（の著書）を通じてガリレオが一言も出てこない。これはちょっとね、まずいよ。これで文明語ろうってたって、そりゃねえ、無理な話だよ！ もう一人の先駆者にシュペングラー（Oswald Spengler, 1880–1936）がいる。シュペングラーは面白いよ。荒っぽいけど、面白い。だからシュペングラー、トインビーを読んで、やっぱり自分なりの文明システムを考えようっていうわけで、僕自身のシステム、これ（新刊『人類史の精神革命』中公選書、2022年）にも書いてある「五段階説」を考えた⁷。

というわけで、比較っていうことは僕にとって、やっぱり重要な要素ですね。だからテキストを読むときもアラビア語、イタリア語、色々やってきたけど。

7 人類の歴史を「人類革命」「農業革命」「都市革命」「精神革命」「科学革命」の5段階の革命で捉えようとするもの。新刊では主に「精神革命」の内容が論じられた。

エジプト語をやったときはみんな困った。あのエジプトの絵文字だよ。みんなそこまではついてきたけど…。それから、みんなを困らせたのは、やっぱりバビロニアの楔形文字。あれは本当に難しくてね、みんなを悩ませたね。よくついてきたよ、僕の弟子たちも。テキストを渡して、はい読んでらっしゃって。もちろん文法はやるよ。Wilson の *Egyptian Grammar* を読んで、練習問題もやって。それで、原典から読みましょうと。僕は原典主義っていうのでやるよ。そこ（新刊）にも書いてあるけどね⁸。

2-4. 学部で哲学を学ばれたことが、その後の先生の科学史・比較文明史研究にどのような影響を与えたか

「学部で哲学を学ばれたことが、その後の先生の科学史・比較文明史研究にどのような影響を」。ああ、これもいい質問だね。

僕の本の特徴は、やっぱり哲学が根底にあるってことじゃないかな。僕の本はただの歴史家の本とちょっと違うと思う。解釈がね。それからラディカルに考えるってこと。根本から——radix っていうのは「根」って意味だけど、ラディカルに考える。これが哲学だよ。哲学っていうのはラディカルでなかったら哲学じゃないよ！ 哲学っていうのはラディカリティ（根本性）だよ。根本性のない哲学っていうのは単なる… うーん、何やってんのかねえ！ 誰々の哲学、とかよくあるけど、ハイデガーならハイデガーばかりやって、それで哲学やってますなんてのは…。今はなくなったかな？ 昔はそういうのが多かったよ。哲学というのは誰々の哲学で、「じゃあ先生はどう考えるんですか？」って言うと、何にも（答えられない）。それじゃダメなんだよ。ラディカリティが哲学なんだから。

そういうわけで、哲学は、やっぱり僕の基礎にあるなあという気がする。でもいわゆる外国哲学の紹介、そういうのが哲学だっていうんじゃない。ラディカルに考えるということだね。

8 新刊ではソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想が論じられるが、「かれらの生涯と思想への分析は、あくまでも原典に基づき、原語の意味を重視している」（6-7 頁、傍点原文）と述べられている。

3. 現在の科学史・科学哲学研究をどうご覧になっているか

で、3番目の問題点だね。「現在の科学史・科学哲学研究をどうご覧になっているか」。これも、思うに、今の科学史は (数秒の沈黙)、なんというか、魅力がないな。僕が科学史をやり出したときの、うん、あの熱い魅力がない。まあ、これはいいんだけど、戦時中の日本のエンジンがこういう風にして変わってきたとか何とかって言う ...。そういうのはもちろんやってもいいんですけど、なんかねえ、小さいなあ、っていう感じがする。

それからもう一つは、外国へ出したらどういうことになるのか、っていうこと。この2つを考えてみなきゃいけない。科学哲学も同じだね。国際学会に出てどういう話をするかだよ。外国人も惹きつけてね。それで自分ところの国の戦時中のある短い期間に、どんなエンジンの開発がどうこうって、そんなの外国人が聞いてもしょうがないでしょ、ね？ そういう特殊研究のグループはあっていいし、それなりの意義はあるけど、もうちょっとねえ、なんというか ... 向こうにも関心が持てる、共通の土俵に乗れるような。共通の土俵で勝負しなきゃダメだよ！ 日本人だけで、そういう日本的テーマを、なんかごちょごちょ小さくやってるだけじゃこれはダメだよ。

科学哲学もそうでしょう。大森さんに学ぶべきだ。大森さんはすごかった。自分の考えしか言わなかった。だからね、偏見もあるかもしれない。でも偏見もまた面白いんだ。よく考えられた偏見だから、一見偏見に聞こえるけど、議論しているうちにわかってくるんだよね。「時は流れない」⁹とか、そういういろんなことを言い出すよね。でもね、本当に考えてる。責任を持つてる、大森さんはね。それがやっぱりね、なきゃいけないと思うんだ。

僕は、日本科学史学会の会長とか、日本の比較文明学会の会長もやったけど、国際比較文明学会も、僕を終身名誉会長にしてくれた。その国際比較文明学会の会長を4年間やったけど、そのときは毎年アメリカの大学で会長講演をやっ

9 Cf. 大森莊蔵『時は流れず』青土社、1996年。

たよ¹⁰。今はあんまり会長講演をやらないって聞いたけど、それじゃダメなんだよ。会長講演をやらないのは会長が勉強してないってことなんだよ。絶えず向こうを刺激するような（話をして）、「次は何を話しますか？」と尋ねられるようにならなきゃいけない。そういった国際性を僕は望みたいね。

なんだったら国際学会行ってさ、「こんなことをアメリカの誰かが言ってるけど、それはちょっと違うでしょ」くらいのことは言わなきゃダメだよ（笑）。外国研究だからって、外国の方が進んでいるなんてことは...ない！ 全然それはない。もう平等です！ そういう訓練をする必要があるかと、僕は思うね。

（以下、しばらくインタビューをした院生三人の研究について談義が続いた。そして世界的なイスラーム学者・言語学者である井筒俊彦の話に移る。）

○井筒俊彦との関係

...さて、これで一応答えたことになるかな。

鶴田：はい、ありがとうございます！

何か質問残ってたら。

荒木：そうですね、1点だけお聞きしたいのですが、井筒俊彦さん（1914-1993）と関係や交流などはありましたか？

井筒俊彦と交流？ あるよ。あるどころか、僕の...なんていうか、とても親しくしてくれた人だよねえ。

一同：へえー！

10 『著作集』第12巻に所収。「筆者はこの前年1995年にこの学会の会長に選ばれたので、以後3年間毎年、会長講演を行うこととなった」（388頁）とある。

だって井筒さん、アラビアとかイスラムをやってたからね。僕がアメリカから帰ってきたときに対談もしてね¹¹。それを井筒さんが『叡智の台座』（岩波書店、1986年）というのに収録してくれたけど。

井筒さんは偉い人だね、あの方は！ あの方は日本の学者で...、日本の学者で偉い人という、僕は二人挙げたいね。一人は井筒俊彦で、もう一人は中村元（1912-1999）。この人はインドをやってて、この人も国際的な書物を書く。

偉い偉いって言っても日本で言われてるだけでね、外に行ったら全然何にも、という人もいる。だけど井筒さんは本当に国際的に、よく出て行ってね、論争もする。知識も広い。それから中国のこともわかる。イスラムだけじゃないね。日本のこともわかる。インドのこともわかる。言語的な分析も正確だよ。プリンストンの高等研究所でも、ケンブリッジ大学でも、僕が一流の学者と話していると必ず井筒さんのことが出てくる。

でもあの方が本当にやりたかったのは、言語哲学だなあ、きつとね。言語哲学なんだよ。アラビア語じゃあないんだよ。言語哲学で、言語の起源の問題をやりたかったんだろうね。わかりにくい。正直言ってわかりにくい。僕も井筒さんをわかりきったとは言えない。

でもなんか彼と話してるとね、なんというのかなあ...、学者の偉大さっていうかね。学者の「大きさ」、これを感じるよね。井筒さんと話してると。とにかくあの家に行くと、壁じゅうずーっともう図書。図書がね、すごいんだよ！ サンスクリット、アラビア語、ペルシャ語、何々...、中国語、日本語はもちろん、ガーッと並んでる。で、その中で話をするんだけどね。行ったことないだろう（笑）？ 今、それらはたしか慶應義塾大学が分散しないように買い取ったと思うけど¹²。

...あと二人はなんか、いい？ それじゃあこれで終わっても。

11 『著作集』第11巻所収の「イスラーム文明の現代的意義」を指す。

12 慶應義塾大学の三田メディアセンターに「井筒俊彦文庫」として所蔵されている。

須田：全部聞けました！

鶴田：ありがとうございました！

荒木：ありがとうございました！